

Essay 01#

市立貝塚病院 総長
小川 道雄

「オレンジガール」 私の読書案内



ゲオルグ・リード、15歳。11年前に死んだ父親からの手紙を受け取る。物置にしまってあった赤い子供用の自動車、その内張りの中に隠してあった。「赤い自動車は絶対処分しないでほしい」、生前父は自分の母親であるゲオルグの祖母に、そう頼んでいた。ゲオルグが内容を十分理解できるようになったとき、読んでもらいたい、と11年前に書いた「未来への手紙」である。

ゲオルグが4歳のとき、医療センターに勤める医師だった父は、不治の病で死んだ。本書では、父からの長い手紙と、そのところどころに入ったゲオルグの感想、父の質問に対する答えを一冊の本にまとめてある。ベストセラーとなった哲学書「ソフィーの世界」でよく知られるノルウェイの作家ヨースタイン・ゴルデルの作品。若者向けだろうが、私のような老人の心にも、鋭く問いかける。

~~~~~

「小さな大人になったゲオルグに尋ねたい重要な質問がある。その前に『ドキドキするような物語』から始める」と父は言う。そこから長い手紙が続く。

十数年前、1970年代の終わりのある月曜日、19歳で医学生だった父は、乗客であふれかえったオスロの路面電車に乗る。大きな重そうな茶色の紙袋をかかえた女性が、通路に立っていた。袋の口までオレンジが詰まっている。同じオレンジ色のアノラックを着た彼女に、父はどこか他人とは違う特別の感情を抱く。その女性は目顔で挨拶するような素振り。

電車がカーブで傾く。重そうな紙袋を守ってやらねば、と父は手を伸ばし、袋の底の方を押さえる。途端に押し上げられた紙袋が落ち、数十個のオレンジが車内に散らばる。女性は悲しそうな表情。オレンジを拾い集める父を見つめ、「おばかさんだこと」と言って電車を降りていく。

あのオレンジガールに会い、埋め合わせをしなければならぬ、と彼女が降りた付近を何時間も歩きまわる。それから毎日、路面電車をのぞいたり、停留所の周囲を歩いたりするが、見つからない。しばらくして学生仲間の溜まり場のカフェに入ると、座って本を読む彼女がいた。やはりオレンジ色のアノラックを着て、オレンジのいっぱい入った大きな紙袋を置いている。父が前に座ると、彼女はだまって父を見詰め、父の手の上に手を重ねる。しかし目に涙を浮かべ、店から出ていってしまう。こ

の日もやはり月曜日だった。

再会しようと、父は計画的に、論理的にオレンジガールを捜す。2回とも月曜日に会った。オレンジにうるさい人だから、きっと大きな青空市場で買うのだろう。ビニールでなく紙の袋だったし、市場だ。

路面電車の停留所に近い青空市場へ3週連続して通う。3度目の月曜日に、市場でオレンジを選んでいて彼女を見つける。見ていると、全く違うオレンジの選び方。1個ずつ取り上げ、丹念にチェックして、紙袋に入れるか戻すか、している。1個に30秒もかけ、できるだけ大きさ、形、色の異なったオレンジを選ぶ。そして迎えにきた男性の白いトヨタに乗って走り去る。その後、父は何週間もオスロで人の集まりそうなところへ行き、オレンジガールを捜す。しかし見つけれない。

初めて会ってから2カ月後のクリスマス・イブ。ひょっとして彼女がクリスマス礼拝に参列するのでは、と父は大聖堂の礼拝に出る。そして参列しているオレンジガールに気づく。礼拝が終わって大聖堂を離れる彼女を追い、陽気な調子で「メリー・クリスマス！」と挨拶する。彼女もかすかに微笑み、「メリー・クリスマス！」と応じる。電車での失敗を話しても、忘れていた様子。

「次はいつ会える?」「せめて半年待ってもらえるなら、また会えるわ。そうしたら、残りの半年は毎日一緒にいられる」

それから「それじゃあ、よいクリスマスを……。ヤン=オーラブ!」と父の名前を言って去る。どうして名前を知っているのか、どうやって知ったのか、そしてどうして半年待たなければならぬのか?

その冬も、父は人々が集まる場所に行って捜すが、どうしても会えない。4月の終わりになって、美しい『オレンジの園』の絵葉書が父のところに届く。スペインのセヴィリアの消印。「もうしばらく待ってもらえる?」とあった。

どうして父の住所がわかったのか?



なれそめから始まるオレンジガールの物語は、ここから先も決して謎解きのミステリーではない。それは父が息子に問いかけたい真剣な質問の前提となっている。「古今東西、涙にむせいで幾何学や元素の周期律表に別れを告げた人は、だれもいない」「人が別れを告げるのは、この世界であり、人生であり、物語なのだ。そして自分が本当に好きなごく少数の選ばれた人なのだ」と父は書く。



父は再入院の前日、夜中に眠れず、ベランダの外のテラスに座っていた。そこにゲオルグがよちよち部屋から出てくる。眠れない、と言って。父は抱き上げ、それから空のこと、月のこと、星のこと、宇宙のことを、思いつくまま夜の明けるまで話す。ゲオルグはじっと抱かれたまま、さわざもせず、眠りもしない。

ここまで手紙を読んで、ゲオルグはあの外のテラスの夜のことははっきりと思い出す。唯一の父の記憶。そして父が泣き出したことも。

父はゲオルグと過ごしたたくさんさんの想い出も、書いている。フィエルステーレンの山小屋、ソグン湖のまわりの散歩、父とのコンピュータゲーム。しかし最後の夜のこと以外、まったくゲオルグの記憶にはない。



古くからよく知られてように、われわれには3歳前後のある時期までの記憶は、残っていない。これは「幼児健忘症」とよばれる。その機序として、もともと幼児期には記憶力はない、という説(海馬の歯状回の完成までの間は記憶できない)は別として、種々の説がある。例えば、脳の発達の過程で記憶が消去されてしまうという説、ある

いは記憶はあるが思い出せないという説、など。

幼児健忘症について広く研究を行っているニュージーランド・オタゴ大学のハーレーン・ヘイン教授は、健忘がみられるのは言語能力がないからだ、と報告している。「記憶がないのではなく、それを説明できないが正しい」とする。言語能力の獲得と記憶の形成は、同じ時期にみられる。彼女らのこんな研究<sup>1)</sup>がある。まだ言葉を話せない幼児と、話せる幼児にゲーム（一連の操作をすると、最後に人形が出てくる）をさせる。そして正しいゲームを行う順序を記憶させ、半年ないし1年後に再びゲームを与える。どちらの幼児も、ゲームをすることはできた。非言語的な記憶をもっているのだ。しかし言語記憶は異なり、ゲームを最初に経験した時点で話せた幼児は、具体的に質問に答えることができた。一方話せなかった幼児は、検査時まで言葉が話せるようになったにもかかわらず、自分の非言語的な記憶を、言葉に翻訳して説明することはできなかった。



父は問いかける。ゲオルグが3歳半のときの復活祭の休暇に、山小屋に言ったことを覚えているだろうか、と。この直後に、父は深刻な病にかかっていることを知る。父はこの休暇に強烈な印象をもっているが、ゲオルグにはその記憶はない。山小屋の写真や、そのビデオをみたが、やはり全く記憶はない。

そして父は尋ねる。宇宙の誕生のとき、前もって選択する権利を与えられたとしたら、君はいつかこの地上で、たった一回限りの人生を生きることを選ぶか？ 短い人生であろうと、長い人生であろうと。それをすべて後に残して、この世から去ることも覚悟して。それともそんなことなら、そもそもその選択を拒む方を選ぶか？ そうすれば、どんなに愛しいものでも手放さねばならぬことを、知らないで済む。人間として生きる限り、はじめから所有しないよりも、いったん所有して

愛着をもったものを失う方が、はるかに辛い。

ほんの短いあいだ地上に生き、やがていっさいのものごとを別れを告げて二度と地上には戻ってこない方を選ぶか、それともはじめからそれを辞退するか？ 生を選べば死を選ぶことになる。オレンジガールに出会わなかった方が、ずっと良かったのか？



「人が別れを告げるのはこの世界であり、人生であり、物語なのだ」と父は言う。オレンジガールはその物語である。ほんのささいな行き違いがあっても、この物語は完成しなかった。

ゲオルグは何回も手紙を読み返し、やがて確信をもって父に答える。この地上で生きることを選ぶ。何千万年という出来事の積み重ねによって、この世に生まれたことを知って。そしてゲオルグがどう生きるかを通して、父の存在を意義あるものにする。それは必然的に、父をすべての不安から解放するものだった。



『オレンジガール』  
ヨースタイン・ゴルデル 著  
猪苗代英徳 訳  
日本放送出版協会, 2003.  
原著: Jostein Gaarder:  
Appelsinpiken, 2003.

## 文献

- 1) Simcock, G. & Hayne, H.: Breaking the barrier: Children fail to translate their preverbal memories into language. *Psychol. Sci.*, 13:225—231, 2002.